

# 顔画像を用いた自己の主観年齢の推定

## —顔の蓄積記憶の牽引による自己若年視傾向の検証—

### Estimation of Subjective Age Based on the Facial Images of Others: Experimental Verification of a Younger Identity by Misleading the Stored Memory of a Known Face

東泰宏<sup>1)</sup>、小西正人<sup>1)</sup>、藤澤隆史<sup>1) #</sup>、長田典子<sup>1)</sup>

Yasuhiro AZUMA, Masato KONISHI, Takashi X. FUJISAWA, Noriko NAGATA

E-mail : konishi-m@kwansei.ac.jp

#### 和文要旨

自己がイメージする自分の年齢を主観年齢と定義し研究を行っている。主観年齢は、他者の顔画像が自分より年上か年下かの年齢判断課題を相対的に行ってもらい、得られた評定値の分布データから「同じ年と感ずる顔画像の年齢」を求めることで得られる。日本人および米国人における顔画像を用いた主観年齢は総じて実年齢より若くなった。このとき、自己若年視傾向の要因としては、(1) 自己の顔の蓄積記憶による牽引の要因と、(2) 社会心理的な要因、の2つの可能性が挙げられた。本研究では、(1) 顔の蓄積記憶による牽引の要因について考察するため、旧知（兄弟姉妹）の他者顔と未知の他者顔の相対的年齢比較課題を実施した。その結果、未知の他者顔に比べて、旧知の顔を若年視する傾向が確認された。これは、顔の経年変化が蓄積記憶された結果、年齢イメージが若年方向へ牽引されることを示唆している。本研究の結果より、顔の若年視傾向の要因のひとつとして、蓄積記憶の影響があることが示唆された。

キーワード：顔画像、主観年齢、実年齢、非線形回帰分析

Keywords : Facial images, Subjective age, Real age, Non-linear Regression Analysis

#### 1. はじめに

コミュニケーションにおいて、人は相手の顔や声などの情報をもとに相手の性別や年齢など様々な属性を推定する。中でも年齢は、相手との関係性を決定するための非常に重要な情報の1つであり、我々は年齢の情報を基に相手との関係性にふさわしい態度や言葉で接しようとする。ところが、我々はしばしば、相手の年齢を実年齢より高く推定し、後になって「もっと年上だと思ったのに…」と意外に感じることもある。

筆者らはこの「他人の顔は年上に見える」傾向が、相手の年齢推定を誤ったのではなく、自己の年齢を実年齢よりも若く知覚しているため引き起

こされた現象であると仮定し、日本人および米国人を対象に研究を行ってきた [1]-[4]。具体的には、まず評定者に実際の対面的なコミュニケーション状況と同様に、呈示された他者の顔画像が自分より年上か年下かの相対的な年齢判断課題を行ってもらい、得られた評定値の分布データから、「同じ年と感ずる顔画像の年齢」を「主観年齢」[5] [6] として算出した。日本人および米国人の主観年齢を図1に示す。

その結果、1) 日本人および米国人の主観年齢は総じて自己若年視の傾向があること、2) 日本人男性は米国人男性と比べて、主観年齢の値が顕著に低いこと、3) 顔画像（評価対象）の国籍の

<sup>1)</sup> 関西学院大学大学院 理工学研究科、Graduate School of Science and Technology, Kwansei Gakuin University

<sup>#</sup> 現在、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科、Graduate School of Biomedical Science, Nagasaki University